屋敷遺跡

伝説の中世の町を発見

屋敷遺跡は、早池峰山に源を発する稗貫川が、支流の中居川と合流する大迫町の中心街に隣接しています。昭和62年の発掘調査において縄文時代後期末～晩期の多くの遺物とともに、永楽通宝などを伴う中世の竪穴建物跡1棟が確認されています。

平成 17 年、遺跡内に大迫保育園が新築移転されることになり、事前の発掘調査が行われました。その結果、中世の竪穴建物跡 5 棟、掘立柱建物跡 3 棟などが検出され、中世末期から近世初頭頃の陶磁器や砥石、木製品などが出土しました。掘立柱建物跡は、屋敷遺跡の中央を通る「屋敷の中道」という道路に沿って並んでいましたが、この道は中世の遠野街道といわれています。

伝承では、ここに「九日町」という中世の町場があり、今から約 400 年前の元和 3(1617) 年に南部利直によって現在の大迫三町に移されたと言われています。このことは、屋敷遺跡から出土した陶磁器の多くが 16 世紀後半から 17 世紀前半のものであることなどから証明されました。伝承と発掘調査の結果が一致した極めて稀な事例となっています。

やしきいせき